

Ms 4. 2. 2009
論文依頼 27. 1. 2009
校正なし

古代インド文献に見る天空地

後藤 敏文

中空 — Aranya — Anterikṣa } 西村 4. 2009
祭場が天空地に対応

Trita

祭火の中心が祓の世界 X88

→ 三つを澄地/井戸に在る三つは ⑩ 11. 2011

Br. 10. 11. 13 Ekata, Dvita, Trita (Āpeya, Āpiya?,
Ātmeya / Ātmīya?) MS-KSATS → Bloomb. AJPL 4 (1896)

430 "Trita, the scape-goat of the gods, in relation to AV. 11. 12. 13"

< MoCo JRAS 1893 41ff. >

「天空の神話—風と鳥と星」

篠田知和基・編

2009

3月25日 楽環書院(名古屋)

古代インド文献に見る天空地

後藤 敏文

古代インドの文献から、シンポジウムのテーマ「天地のはじめ」に関わる知見を、チェックリスト提供の意味で挙げてみたい。

1. 三界

インド最古の文献は『リグヴェーダ』 *R̥gveda* である。紀元前 1200 年頃ほぼ現在の形に編集固定されたものと考えられる。『リグヴェーダ』以来、インドの世界観には天空地の「三界」という概念が強く打ち出されている。原語では *tráyas + lokás* に当たり、実際、前 800 年頃からの散文文献にはこの表現が頻出する。しかし、『リグヴェーダ』には見られず、「3つの天」、「3つの地」、あるいは「3つの空間 (*rájāmsi*)」という表現が用いられる。いずれも省略の複数による用法で、例えば「天たち3者」、すなわち「天・中空・大地」を意味する。『リグヴェーダ』の詩人は、おそらく省略複数の語法を逆手にとって、天や地にそれぞれ3つの領域があるかのように謎めいた言辞を用いることがあり (例えば、I 164,6,10, III 56,2, VII 87,5)、実際そのように再解釈された可能性もある。「3つの光空間 (*rocaná*)」もしばしば現れるが、意味するところは必ずしも明らかでない。ヴェーダ散文文献 (ブラーフマナ) における「三界」は、1) この世界、または、大地、2) 中空、3) 天、かの世界、または、太陽光のある世界、の三者である。

「三界」の概念は、基本的には後の叙事詩や仏典にも生き続けている。叙

事詩『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』、古典文学等では *tri-loka-* という複合語が用いられ、「天空地」を意味する。仏典にも同じ用語が見られる。しかし、仏典で「三界」というときには、普通 *tri-dhātu-* が意図されている。原義はおそらく「3層からなる(もの)」であり、『リグヴェーダ』に既に「3層からなる地」、中性単数形で「3層からなるもの(即ち世界)」という用法がある。仏教の教義における *tri-dhātu-* は「欲界」、「色界」、「無色界」の三者を謂う。「欲界」は欲望 (*kāma-*) の支配する層で、地獄、餓鬼、畜生、ひと、天 (*deva-*、「神々」の漢訳語) の5趣(輪廻の帰結としての生物の種類)の住む世界、「色界」は欲望を克服しながらも身体をもつ者たちの世界で、複数の修行段階に対応させられる。「無色界」はそれをさらに超越した世界で、禅定の進んだ4つの段階に当たる。さらにその上に「仏界」があるとされる。ジャイナ教では「非世界」の中に「世界」があるとされる。「世界」は常住、無始無終、有限で、「寝台(1)の上にヴァジラ(金剛杵)(2)を置き、その上に上向きの太鼓(3)を据えた」形であるという。(1)–(3)は、それぞれ、地獄、畜生(「水平方向に母胎をもつもの」)・ひと、および、天(神々)の世界である。

仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教では地獄の観念が世界構造の中で意味を増すため、古くからの「三界」の図式は簡単には当てはまらなくなっている。地上の人間の寿命はインド・ヨーロッパ語族共通時代の昔から100歳とされていた(W. SCHULZE, *Kleine Schriften* 147f., R. SCHMITT, *Fs. Pisani* 910, etc.)。天上の神々は「不死」であるが、ガンダルヴァ(神となった祖霊たち)と共に天上に住む水の精(アプサラス)のウルヴァシー(→ 7.2.)は「長い寿命」をもつとされる(RV X 90,10)。地上の時間と天上の、さらにその中の各階層における時間の長さには大きな差があった。「人間五十年」は『阿毘達磨俱舍論』にある「男たち(にとつて)の50年は、欲(界)において、下の方にいる天を住まいとする者たちの昼夜である」、およびその注「人間たちの間において50年であるもの、それは、欲界において、四大王の身体をとる下の方

にいる神々の一昼夜である」に基づき、ヴェーダ文献において整備された時間換算の伝統の上に立つ。仏教教理中で、神々の世界が欲界中の諸天と、色界中の諸天とに分けられたことが、本来の100年が50年に切り詰められる動機の根底にあると思われるが詳細は明らかでない。「四大王衆天」は欲界に属する六欲天の、そのまた最下位に配当される。上の訳中「人間たちの間において」とあるのは、原文では「マヌシュの子孫たちの」、つまり「ひとたちの間」である。こうした漢訳仏典の複数所有格または処格の語法から、平安時代以降次第に「ひと」を「人間」というようになったものと聞く。「天人五衰」は天上に生まれ変わっていたガンダルヴァの寿命が尽き、地上に再生する準備を促す徴である。天界での長い寿命という古い観念と仏教固有の「中有」49日との間には矛盾があるが、ヴェーダ文献中で展開した思想の幾つか、当のヴェーダ文献には語られていないにもかかわらず、仏典にタイムカプセルのように保存されている。

2. 神々と人間たち

「神、神々」に当たる語は一貫してデーヴァ *devá-* であり、「天に存する」を原義とする。ラテン語 *dīuos, deus* (古ラテン語 *deiuos*) などと同起源で、インド・ヨーロッパ(以下「印欧」と略す)祖語 **deiyó-* に遡る。この語は **dǵéu-* 「天」から作られた形容詞で、リグヴェーダには形容詞の用法も依然残っている。印欧語族共通時代に、神々は「天に住む(人々、種族)」と考えられていたことになる。**dǵéu-* 「天」というのは、具体的には、晴れた昼に見える輝く覆いのことと考えられる。ドイツ語 *Himmel*, 英語 *heaven* の基になったゲルマン祖語 **hemena-* は「岩でできた」と解され(研究文献については、M. MAYRHOFFER, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen I*, 138, s.v. *ásman-*, 1987 参照), おそらく天に懸かる形容詞に遡る。天を「岩」とよぶことはイラン(新アヴェスタ語, 古ペルシャ語)にも見られる。**dǵéu-* 「天」は、古インドアーリヤ語ディヤウス *dyáv-*, 主格単数 *dyáus* (< **dǵéu-s*), ギリシャ語ゼウス(もとはズデウス) *Zeús* ほか、印欧諸語に遺る。「父なる天」

という表現も印欧祖語 **d̥i̯éus* **ph₂tér* に遡り、各言語に在証される：ヴェーダ *dyáus pitá*, ギリシャ語 *Zeús [...]* *patér*, ラテン語 *Iu[p]piter* (ユピテル, *p* の重複は呼びかけ形における強調に遡る) など。これに対し、「母なる地」という表現は、語としては印欧祖語には辿れない。しかし、これは、各言語において「地」の語彙が置き換えられた結果に過ぎないと考えるべきであろう。例えば、印欧祖語 **d^héǵ^hom-/d^héǵ^hém-* 「地」は、インドでは、主として『リグヴェーダ』に *ksás*, *ksám* などとして残るだけであり、普通は *pr̥thiví-* の語が用いられる。この語は本来の「地」を修飾する枕詞に近い「幅広い」という形容詞女性形が独立して用いられるようになったものであり、「地」そのものを名指しでよぶことは、「天」の場合と異なり、避けられた。*pr̥thiví-* を一般に「大地」と訳すが、「母」とよばれ、「天と地と」は「母たち両者」または「父たち両者」とよばれる。

神々は「天」*dyáv-*、または「太陽光の届く」ないし「太陽光の歩む」世界 (*svargá-loka-* または単に *svargá-*) に住んでいた。祭場に燃え立たせられた祭火は人間たちの供物を彼らに届ける「使者」であり、その進む道が祭火の煙と捉えられることも、太陽光線の道を迎るとも考えられていた。『リグヴェーダ』では後者がより本質的に思われるが、ここからは、必然的に、太陽が天界にあいた入り口であり、その向こう側に、光り輝く天界があるとする観念が導かれる。この観念は「ブラーフマナ」文献には明瞭に述べられる。

次項に触れるように、天は大地から押し上げられ、支えによって保持されているが、その両者の中間にある隙間が「中空」である。一般に *antáríkṣa-* (おそらく「間に位置する」から) または *ākāśá-* 「隙間」とよばれる。

神々は原則として天に住まうが、勿論、祭火 (アグニ) が地上に、風 (風神) が中空に、太陽が天にあると表現されることがある。「大地」はそれ自身神であり、スィンドゥ、サラスヴァティー等の河川も地上の神々である。

本来の「デーヴァたち」のほかに、『リグヴェーダ』で「アーディティヤたち」と総称される神々がある。これについては既に幾度か明らかにしてきた

ので、詳しく立ち入らない。アーディテヤ *ādityá-* たちとは「アディティの息子たち」の意味であり、母神アディティ *āditi-* は「拘束をもたない」、つまり、自由の女神である。イラン側でこれに本来対応したのが女神アナーヒター *anāhitā-* 「拘束されていない」と考えられる。インドイラン共通時代、彼らが遭遇した先進文化から移入した（導入せざるを得なかった）社会制度の神格化に遡る。その筆頭が王権の神格化ヴァルウナ *Varuṇa* であり、アスラ *ásura-* 「主、首長」（イランの「アフラ」*ahura-* に同じ）の称号をもってよばれたものと推測される。ヴァルウナに当たる神格は、イランの『アヴェスタ』では、ゾロアスター（ザラスシュトラ *Zaraθuštra*）の宗教改革によりアフラ・マズダー *Ahura Mazdā* 「主である智慧」（ゾロアスター自身は「智慧…主であるところの」と語った）に作り変えられ、その陰に隠れている。そこで、インドイラン共通時代の一群の神の呼称としては「アスラたち」とよぶ。ヴァルウナをはじめとするアーディテヤたちも天界に住まう。ヴァルウナは天上にある「天理」（*rtá-* リタ、ルタ「はまっている、合致していること」）の座を守っている。同時に、ヴァルウナは天空地三界、また、人の身体中にも遍在する水を支配して、法や契約（ミトラ）の遵守を監視する。彼の住まいは千の扉をもつとされ、夜空の星が想定されているものと思われる。

叙事詩以降のヒンドウ世界の世界の文献では、神々はグループに分けられ、天空地の三界に配当されることがあるが、多分に観念的な産物である。このような配当への端緒を「ブラーフマナ」と称されるテキストに見ることは確かに可能ではあるが（前600年以降か）、原則はあくまで、天に神々、地に人間たちである。「父なる天」、「母なる大地」と並んで、「地上のひと」という観念は印欧祖語時代に遡る。ラテン語 *homō* 「ひと」は、リトアニア語 *žmuō*、ゴート語 *guma*、古英語 *guma* などと同じく、上に触れた印欧祖語 **dʰégʰom-/dʰgʰém-* 「地」の弱形から、「特定のものを意味する接尾辞 (individualisierendes Suffix) **-on-*」によって作られた **(dʰ)gʰm-on-* 「地上の者」に基づく。ギリシャ語 *ánthrōpos* 「ひと」は印欧祖語 **h₂ndʰro-h₃kʷo-* に遡り、

「下、低きに位置する者」である (G. KLINGENSCHMITT, *Althochdeutsch*, I, hrsg. von R. Bergmann u.a., 1987, 175 ほか); 複合語の前肢はラテン語 *infra* 「下に」に見られる名詞語幹である。例えばヨーロッパ文化に根強い、上の世界への意識、上に向かうベクトルの重視には違和感を覚えるところがあるが、『リグヴェーダ』をはじめインドアーリア文化にも共通する古くからの観念と言える。インドでは「ひと」を「マヌの子孫」、「マヌシュの子孫」、「死すべき者」などとよぶが、神々に対して「自分たちの方へ」と言う場合には「下へ」に当たる副詞、前置詞が「こちらへ」を意味することが多い。因みに、*mānu-*, *mānus-* はタキトウスの『ゲルマーニア』がゲルマン民族の始祖として言及する *Mannus* と結びつくであろう (*nn* は呼びかける時の強調形により説明できる)。

3. 中空

中空は、風の神が吹き、火神が通い、また、神々が祭場との間を往来する領域である。「満たされている」といわれ、創造讃歌の一つ『リグヴェーダ』X 72,6-7 では、微細な塵によって充満させられていると解釈できる。これは、マリーチを意図するものと思われる。マリーチ *mārīci-* (女性名詞, 通常複数, 摩利支天のもと) は「光り輝く水 (蒸気) の微粒子」(WEBER *Indische Studien* 9, 1865, 9 n.1) で、太陽光線 (*raśmī-* m. 「革紐, 手綱, 光線」) の道通って地から天へと上昇し、雨として地に戻る。万物の生命エネルギーとして、諸世界を循環しながら満たす。SAKAMOTO-GOTŌ, *Das Jenseits und iṣṭā-pūrtā-* ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion, *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik* (Wiesbaden 2000) 476f., 同じく, *Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka, Kultur, Recht und Politik in muslimischen Gesellschaft*, I, Akten des 27. DOT (2001) 161f., 後藤敏文, 人類と死の起源, 『インド学諸思想とその周延』(2004) 423 参照。

「ブラーフマナ」の「新層」には、天空地に、神々—祖霊たち—人間たちを配当している場合がある (明瞭な例については、後藤敏文, 新資料

Vādhūla-Anvākyāna の伝える「Purūravas と Urvaśī」物語、『インド哲学佛教思想論集』、神子上恵照記念論集、2004、858 参照)。この3つの生活領域の間には、通常平面上に想定されるアラニヤ *āranya-* がある。アラニヤは本来「よそ、よそ者 (*ārāṇa-*) に属する、よその (もの、土地)」を意味し、自分たちに属さない土地である。部族が住み、権利を有する生活圏の外、または、それらの間にある「原野、荒野」の意味で用いられる。修行者や仏教僧の移動の意味に用いられる動詞 *vraj* 「さまよう、遍歴する、歩む」(出家者の原語は *pra-vrājaka-* 「歩み出る、遍歴に発つ者」、遊行者は *pari-vrājaka-* 「巡り歩む者」) は、そのような「原野」を行くときに用いられる動詞である。原野は、また、異界との交流が可能な場所でもあったらしい。

祖霊たちは、元来、ヤマの楽園に憩うものとされた。ヤマ *Yamā-* は後の「閻魔」であり、イランの古アヴェスタ語 *Yama-*、新アヴェスタ語 *Yima-* と同起源である。原義は「双子の (一方)」、最初の死者にして死界の王となった。

『リグヴェーダ』におけるヤマの楽園の原型は、苦勞してたどり着くことのできる夏の放牧地であり、谷川が迸り、光溢れ、大樹が日陰を作る高原にある (J. SAKAMOTO-GOTŌ, *Das Jenseits und iṣṭā-pūrtā-* p.480 参照)。我が国の「浄土平」を連想させる。

因みに、*ārāṇa-* 「よその、よそ者」の対概念は *nītya-* で、本来「うちに (...の中、下に、自分のもとに) 存する、うちの」を意味する。おそらく、何ものかの「うちに本質的に存在する」から「常にある」へと展開し、後の文献では「常住」と訳される用例が多い。その否定が「無常」と訳される *a-nītya-* 「恒久的でない」である。『ガリア戦記』にみられるケルトの部族名 *Allo-broges*, *Nitio-broges* (原意は「境界の外にいる者たち」ないし「境界のうちにいる者たち」) はこの対立語が古い起源に遡ることを示唆する: **alno-/*aleno- :: *nītiō-*。



ソグド商人史君 (Wirakak) 墓石槨。後 6 世紀前半, 西安出土。Judith A. LERNER, BAI 15 (2005) による: <<http://www.bulletinasianinstitute.org/m0.htm>>。石槨に記されるソグド語文には吉田豊氏による解説研究がある。史君一家が裁きの橋 (『アヴェスタ』にある「償う人の橋」) を渡っている。家族が揃っていることは、裁きの時が至るまで魂が天界に住むという終末論を前提とする。橋の手前には祭官が立ち、その上にイマの 2 頭の番犬が見える。イマは人間の始祖で、死者の国の王となった。古アヴェスタ語 *Yama-*、新アヴェスタ語 *Yima-*、インドの *Yamá-*、後の「閻魔」である。右上が (肉体を払い落として入る) 最終的天界と思われる。因みに、パラダイスの語はくつろぎの庭園を意味するアヴェスタ語 *pa'ri-daēza-* 「壁を囲む (庭)」, 古ペルシャ語 *para-daida-* 「(内) 壁の外側にある (庭)」に遡る。<大修館『言語』2008 年 12 月号, p.83 から転載>

4. 『リグヴェーダ』における天と地の分ち隔て、太陽軌道の創設

『リグヴェーダ』には幾つかの「創造讃歌」や、様々な空間領域整備に関する言及が見られる。原則は「大地」が先にあり、「天」に当たる部分が上に押し上げられて支えられ、天空地ができた、あるいは、太陽が通れるようになった、とする観念である。「天を支柱によって支える」(動詞は *skambh'*) と

いう表現はインドラ Indra, ブリハस्पティ Bṛhaspati, アグニ Agni, ヴィシュヌ Viṣṇu などの神々について言われ、『リグヴェーダ』に続く文献である『アタルヴァヴェーダ』には、その「支柱」を巡る思弁を収録した讃歌もある。英雄神インドラは「力んで押し上げた」（動詞は *stambhī*）。同じ勲は、ヴァルウナ, ヴィシュヌ, マルットウたち *Matut-as* などについても言われる。ヴァルウナは大地を、革を展ばし張るように広げ、太陽の軌道を確認した (V 85,1)。また、岩を削って太陽の道を開鑿した(VII 87,1)。インドラは大地を押し固め、山々の頂を切り落とした (IV 19,4)。ヴァルウナは天理に従って、地を3層から成るものへと広げ分ける (IV 42,4)。太陽の軌道面（「世界」）より上に、月の世界があり、そのさらに上に星座たちの世界があることは、古ウパニシャッドにはっきりと表明されるが（ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド III 6,1), 『リグヴェーダ』以来の観念と推測される。最古の散文文献『マイトラーヤニー サンヒター』（前 800—）には、太陽 (*ādityá-*) は元来地上にあったが、（人々または神々が）天界に運び上げたとする記述が見られる: I 11,7:169,2—5, III 9,3:116,12—14（西村直子氏の教示による）。

生産は地上でのみ可能であり、天界の神々は地上から送られる供物に依存する。死者が天界に生まれ変わる（再び生じる）とする観念は（おそらく、ヤマの楽園と矛盾しない形で）次第に顕在化した。祭主は天上での生活に必要な部材、資糧を予め生前祭式によって地上から送り届けておく。もともとは一族の祖霊全員がその配分に与るとされたようであるが、個人意識の高まりとともに（祭主たる部族長の権力と富の拡大と共に）、死後自らの「貯金」を自分だけで使えるよう保証する祭式理論が確立されてゆく。「祭式と布施の効力」 *iṣṭā-pūrtá-* がそれで、古ウパニシャッドにおいて「業」 *kárman-* の理論に展開する。阪本（後藤）純子, *iṣṭā-pūrtá-* 「祭式と布施の効力」と来世, 『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』（春秋社 1996）882—862, SAKAMOTO-GOTŌ, *Das Jenseits und iṣṭā-pūrtá-* (上掲) 475—490 が「祭式と布施の効力」の理論を明らかにした。

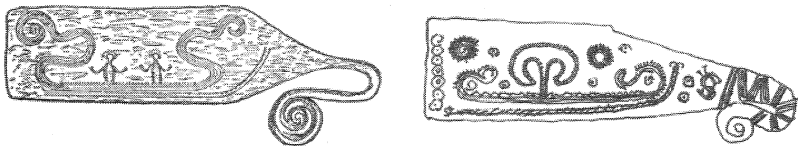
祖霊
と
神々の
間の
媒介
として
働いた

Belege zu suchen!

{ 寿命の神々 — 「成り神々」
いの神々 — 生れかゝる神々 (582)

5. 明けの明星と宵の明星の神話、夜の太陽

アシュヴィン双神、ナーサツテヤ双神とよばれる二人一組の神とその神話が、元来、明けの明星アシュヴィン「(太陽の)馬を司る者」と宵の明星ナーサツテヤ「無事の帰還を司る者」の神格化を核として形成されたものであることを、本稿の筆者は複数の論文で明らかにしてきた。晩に西の果ての海に沈み、拡散した太陽光を船に救出して東の岸边まで運ぶ神話は『リグヴェーダ』と『アヴェスタ』とに共通に語られる。イラン、特にサカ族(スキュタイ)の傭兵がヨーロッパにもたらした儀礼に基盤をもつと考えられるミスラ教の祭壇には、その神話を暗示する図像が複数見出される。ギリシャのカストールとポッリュクス(後のゲミニ)を巡る神話群、ラトヴィアの民謡に類似のモチーフが現れ、偶然とは思えない一致を示す。また、北欧の岩絵や青銅製の副葬品(剃刀など)には、そのモチーフを描いたとおぼしき図像が見られる。図像を構成する要素の中には、世界各地に見られるものがあり、我が国の装飾古墳にも現れる。太陽の復活と死者の蘇りを巡る思弁が背景にある。中核的部分をまとめた論文が現在インドで印刷中である。



デンマーク出土の剃刀(青銅器時代後期)。H. GÜNTERT, *Der arische Weltkönig und Heiland* (1923) p. 273 (左), p.275 からの模写(右)。

6. 年末の12日間

『リグヴェーダ』には、リブとよばれる三神が登場する。f̥bhu- は「巧みな; 技術者, 職人」の意味であり、『リグヴェーダ』には、元来「神ではない」とする言及も見られる。ギリシャ語のオルペウス *Orpheus* と同起源であるこ

とはほぼ疑いない。本報告者は語源に「小さい(者)」を想定している。特別な技術を持つ者たちで、アーリヤ社会内部の職人の代表トヴァシュトリ *Tvášťar-* (原義は「肉切り職人」、インドラのために棍棒を作ったのも彼である) の作った粗末な杯(コップ)を、木質を選び、優れた手斧で4つに作り替えた。アシュヴィン双神に戦車を作り、ブリハस्पティ(祭官たちのことばの神)のために「あらゆる毛色をもった」優れた乳牛をもたらした。ソーマの喫飲と深く関係し、名を変えて夕べのソーマ压榨の最初に与る。供せられたソーマに対する彼らの皮肉(WITZEL-GOTÖ, *Rig-Veda. Das heilige Wissen*, Frankfurt 2007, 724, I 161,8 への WITZEL の注記参照) などをも考慮すると、アーリヤの部族に文明の利器を供給し、ソーマを古くから知っていた先進技術者集団を想起させる。彼らは年末の12日間(「12の昼の間」 *dvádaśa dyūn*), アゴーヒヤのもとで客人として眠るとされる(IV 33,7)。アゴーヒヤ *ágoḥya-* (「隠され得ない者」?) は「鼓舞する、権限を与える神」サヴィトリと同置されることがある。後者は毎日の太陽の運行に関わるのに対し(本報告者は黄道光に原型を見ている)、前者は一年の太陽に関わる。「年末の12日間」は太陰暦の一年を太陽暦の一年の始まりに合わせるために必要な「閏月」に当たると考えられ、『リグヴェーダ』にも、普段部族内に住まない職人を招いての、謝肉祭的行事があったことを伺わせるものがある。WITZEL-GOTÖ 同書, 722-725, I 161 に対する GOTÖ による注解, 特に 725 頁を参照されたい。

7. 天界から降りてきた樹

高橋宏幸氏の発表に、太陽の戦車を駆ったパエトーンが落下して死んだのを姉妹が泣き悲しみ、ポプラに変身させられるギリシャの神話が紹介されていた。ヴェーダ文献から、樹木への変身譚を二つ紹介したい。

7.1. 100の鉄(または銅)の砦(防御柵)に守られている天上のソーマを奪って鷹が飛び発った時、監視していた射手クリシャーヌが矢を射かける。そ

の時、一枚の羽毛が軌道の中を落ちて行き、それは地上のパルナ樹となった。パルナ *parná-* は葛のような三出葉をもち、オレンジ色の花をつけるマメ科の落葉樹ハナモツヤクノキ（花没薬樹）、*Butea frondosa* である；別名をパラージャという（西岡直樹『インド花綴り』1988、46-49「春を告げる花」）。*parná-* は、本来、鳥の「翼」と「羽毛」とを意味し、ドイツ語 *Farn*、英語 *fern* 「シダ」も同起源に遡る。『リグヴェーダ』IV 27 に短く言及されるこの話はヴェーダ文献に好まれ、祭式において牛を牧草地へ駆りたてるのに用いる枝や種々の木材としてパルナ樹が使用される根拠として語られる。辻直 郎『古代インドの説話』（1978）176-187、西村直子『放牧と敷草刈り』（2006）94-100 参照。

7.2. 水の精（アプサラス）であるウルヴァシー（語源はおそらく「雌羊」）は地上の王ブルーラヴァスと4年間暮らした後、天界に帰る。王は彼女を追って彷徨い、彼女が鳴の姿で帰って来ているのに出会う。王は妻の帰還を願うが拒絶され、その代わりに、生まれていた男児（アーリヤの祖アーユ）と火とを与えられる。その火を用いて祭式を行えば、死後天界に生まれ変わり、共に生活することができるという。王は村落に帰って来るが、男児と祭火とを同時に村落に運び入れることはできないということで、火鉢（ウカー、英語 *oven* と語源的に関係する）に容れた祭火を原野（→ 3.）に置いておく。取りに戻ってみると祭火は消え、火鉢はシャミー（アカシアの一種）に、火はアシュヴァッタ（インドボダイジュ）に変身していた。それ故、祭火はシャミーとアシュヴァッタとから作った道具を用いて鑽り出す、という内容である。火鑽り道具の上部はブルーラヴァスを、下部はウルヴァシーを象徴し、生まれる火がアーユである。インドボダイジュはイチジク属の高木で、鳥などの食べた種から他の木の樹上に芽吹いて下へ向かって根を下ろし、やがて元の樹を包み込んで殺してしまう「絞め殺しの木」である。上から下へ向かって成長することと新芽が赤いことが話の動機付けになっている。辻直四

郎『同』28-34, 後藤敏文, 上掲「Purūravas と Urvaśī」物語, 845-868, より詳しくは, T. GOTO, “Purūravas und Urvaśī” aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. IKARI), *Anusantatyai*, Festschrift Narten (2000) 79-110 参照。

8. 『リグヴェーダ』の星

ヴェーダ文献の背後には, かなり進んだ星空の観察と暦の知識が想定されるが, 夜の語られることが少ないため, 情報は限られている。インドでは, 午前, 昼, 月の満ちる半月間, 太陽が北行する6ヶ月間(昼が長くなる冬至から夏至まで)が吉とされ, その対偶への言及は控えられる傾向にある。その中で, 北斗七星とすばるとは別格である。北斗七星については『リグヴェーダ』に既に「7匹の熊, 「七人のリシ」とよばれている箇所がある。「熊」は, 星座に関する知識がどこかで確立していて, それを移入したことを推測させる。後にはもっぱら「七人のリシ」が用いられる。リシとはリグヴェーダの讃歌を作ったかつての聖仙であり, 詩人たちの祖先アンギラスたちでもある。すばるは『アタルヴァヴェーダ』以来クリッティカーとして現れる。*kṛttikā-* は「糸を紡ぐ女」または「革職人の女」と語源解釈可能で, 常に女性複数である。後者の場合には, プレイアデスの形を皮革に擬えていたことになる。皮革製品のマークを想起されたい。しかし, 革職人は, 他の多くの職人と同じくシャミトリ *śamitār-* と謂われ (V 85,1), 男性であるから, 「糸を紡ぐ女」がふさわしく思われる。「熊」同様, 先進地域から導入した翻訳借用語であろう。クリッティカーと暦の問題については, 本報告書中の阪本(後藤)純子の寄稿を参照されたい。シリウスは『アヴェスタ』において重要な星であるが(新アヴェスタ *tīstriia-*), 『リグヴェーダ』にも *tīṣyā-* (*tīṣīya-*) という形で一度だけ現れる。北極星は古典期には「動かぬ(星)」*dhruvā-* とよばれるが, ヴェーダ文献を通じて用例がない。月宿は『アタルヴァヴェーダ』, 『ヤジュルヴェーダ・サンヒター』以降語られる。以下に挙げる『リ

グヴェーダ』 I 164,15-16 は貴重な典拠である。P. THIEME, *Fs. Schneider* (1987) 329-336 = *Kleine Schriften* 956-963 に負うところが大きい。後藤訳 (WITZEL-Gorō 上掲書中) をも参照されたい。[] は補足, () は説明等を原則とする。複数形は「...たち」と訳した。

8.1. 『リグヴェーダ』 第1巻 第164 讃歌「謎の歌」から

15. いち時に生まれた者たちの中, 第7の者を (人々は) 一人で生まれたと言う。
 まさに6人は双子たちであり, 神々のもとで生まれた聖仙たちであると。
 彼らには, 望みの [場所] が, 領域ごとに配当されている。
 留まる者のために, 彼らは揺れ動く, 見かけごとに作り変えられて。
16. 女たちであるのに, 彼女たちのことを, (人々は) 男たちだと私に言う。
 目を備えた者は見る。盲目の者は見分けることがない。
 見者として, 子供である [のに] 私はそれを理解した。
 それらを識別する者があれば, その者は [当人の] 父の父である。

15の第1行は, 伝統的には, 6組の2月からなる1年と, 1閏月と解されてきた。テーマは北斗七星の $\alpha\beta, \gamma\delta$, および $\epsilon\zeta$ が組をなすように見え, η だけが少し離れていることを言うものと解した。この場合, 第4行の「留まる者」(*sthātre*) は北極星である。16の第1行をテーマはプレイアデス(ドイツ語 *Siebengestirn* 「七つ星」) と解し, さらに, 北斗の妻たちとした。「男たち」というのは, ここには述べられていない「星たち」を意味する語 *stāras* (語幹は *stř-*, 無論英語 *star* と同起源) が男性名詞であり, 「女たち」 *strīyas* (語幹は *strī-*) との音の類似を下敷きにして説明する。「父の父」は, おそらく, 自分の先生よりも能力知識があるという意味で, 祭官学者の知識伝授が既に世襲化し, 父子間でなされていたことを示唆する。

8.2. 『リグヴェーダ』 第1巻 第105 讃歌「トゥリタの嘆き」

次に, 夜空が歌い込まれていると思われるトゥリタ *tritā-* の讃歌を紹介す

る。トゥリタは「第3の男，三男坊」と解される。伝統的注釈は，二人の兄によって井戸に突き落とされた三男坊が思考の中でソーマ祭を挙行し，神々に救ってもらう話とする。同話は『マハーバーラタ』IX 36 に語られ，既にブラーフマナ文献にも触れられている。インドの神話的存在トゥリタ・アーブティヤ *trítá- āptya-* とイランの英雄神スラエータオナ・アースビヤ *θraētaona- āθβiia-* との共通原型を探ると，太陽の行程の第三，つまり，夜の太陽が神々のスケープゴートとして何らかの償いをさせられている可能性が浮上する。M. WITZEL, *Sur le chemin du ciel*, *Bulletin des Études indiennes* 2 (1984) 213-279 には一部星座の同定が見られるが，特に根拠は見出せない。後藤訳 (WITZEL-GOTŌ 上掲書中) をも参照されたい。

1. 月が水たちの中に入って [来ている]。
 よい翼もつ [月] が天 [の中] を走っている (のだ)。
 君たちの，一貴金属の外周 (輻，リム) をもつ者たちよー
 足跡を [人々は] 見出さない，閃く者たちよ。
 私がここにこうしていることを知っていよ，天地よ。
2. 目的をもつ者たちは，また，その目的へと [向かう] ものだ。
 (つまり:) 妻は夫を自らに引き寄せる。
 二人は種牛に属するミルクを飛ばし合う。
 [彼女は] 身をまかせた後，精髓を [自らに] 搾り出す。
 私がここにこうしていることを知っていよ，天地よ。
3. 決して，神々よ，かの太陽光が天から落ちることがないように。
 幸いとなるソーマに与るもの (家系の担い手) の
 欠乏に，いかなる時にも，我々がならぬよう。
 私がここにこうしていることを知っていよ，天地よ。
4. 最近 [なした] 祭式のことを私は尋ねる。
 使者たる者 (アグニ) はそれを明言するがよい。
 どこに，以前の正しく [祭られたこと *istá-*] は行ってしまったのか。
 誰が今の [所有者] として それを 持っているのか。
 私がここにこうしていることを知っていよ，天地よ。

5. 三〔界〕の中で、天の光空間にいる、
 かなたの君たち、神々よ、
 何が君たちにとって正しく〔祭られたこと〕か。何が不正に〔祭られたこと〕か。
 どこに 君たちへのかつての献供は行ってしまったのか。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
6. 何が君たちにとって天理 (*rita*) を保持する〔という〕ことか。
 何がヴァルウナの監察か。
 偉大なアリヤマンの道を通して
 悪意ある者たちを 我々は越えられるのか。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
7. 私は 以前 搾られた〔ソーマ〕について、
 なにかと議論していたその人である。
 その私を、憂慮たちが襲っている、
 狼が喉の乾いた(弱った)獣を〔襲う〕ように。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
8. 肋骨たちが、ライヴァル関係にある女たちがのように
 私を、そこら中、すっかり苦しめる。
 鼠たちがしっぽたちをのように、憂慮たちが私を食いちぎる、
 君に讃歌を捧げる者〔である私〕を、百の意志力をもつ者よ。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
9. かなたの七つの皮紐(または: 光線)たち、
 そこに私の膺は連なっている。
 トウリタ・アープティヤは それを知っている。
 彼は 血の繋がり の為 に歌っている。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
10. 偉大な天の中央に位置している
 かなたの五頭の若い雄牛たち、
 一神々の下に、今、公言せねばならぬことがある。—
 彼らはこぞって沈んでしまった。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
11. ここによい翼をもつ〔鷲〕たちが坐っている、

天の中央にある囲いの中に。

若々しい水たちを越え渡っている

狼を、彼らは道から遠ざけている。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

12. 詩的定言に適ったその新しい〔ことば〕は定め置かれた、

神々よ、公言にかなうものとして。

大河たちは正しく（天理として）流れている。

太陽は実在するものとして続いている。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

13. アグニ（火神）よ、君にはこの例の詩的定言に適った

仲間関係が神々の間にある。

だから君は座を占めて、しかもマヌシュ（はじめの人間）のように、

神々を 祭るがよい、よりよく知っている者として。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

14. ホートリとして、しかもマヌシュのように座を占め、

神々のもとへ〔行け〕、よりよく知っている者として。

アグニは献供されるべき物たちを整えるがよい、

神々の中で、知恵ある神として。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

15. ブラフマン（正しく発語された実現力をもつことば）をヴァルウナは作る。

（ブラフマンが進む）道を見出す者としてその〔神に〕我々は乞う。

（ひとは）心臓を用いて考えを開き展げる。

新たに天理は生まれよ。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

16. かなたの、アディティに属する道であるもの、

〔それは 今〕 天〔の上〕に、公言されるべきものとなされた。

それは、神々よ、踏み越えてはならない。

それを、死すべき者たちよ、君たちは見ることはない。

私がおここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

17. トゥリタは窪みの中に置き入れられて、

助けを求めて神々に呼びかけている。

→ Aśvin I 46, 11
 神々の神々も、
 [S 110]
 天理の道はよく生じよ。
 天の道路は [S 110]
 18. 27 と 28. 4. 1. 2.

それをブリハस्पティは聞いてくれた、
 逼迫から 広い [光空間] を作り出すことによって。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。

18. 赤味がかった狼が、一度、
 私が道を通って行くところを見たことがあったのだ。
 [その彼が今は] [私を] 認めると、伸びをしている、
 肋骨 (全体) に痛みをもつ大工のように。
 私がここにこうしていることを知っていよ、天地よ。
19. この (以上の) ことほぎの歌によって、我々は、インドラを味方に、
 害われることのない勇者たちを伴って、周りの中で卓越してありたい。
 そのことをミトラは、ヴァルウナは (是非とも) 叶えよ。
 アディティは、大河 (スインドウ) は、大 [地]、そして 天は。

注記: 1. 「金または銀の車輻 (リム) をもつ者たち」と星に呼びかける。星は移動しても足跡を残さない。しかも、ここでは水に映る星を見ている。「私がここにこうしていることを」は、文字通りには「こういう私のことを」(以下同じ)。2. つまり: 今頃はきっとやっていることだろうよ。「種牛に属するミルク」は「精液と乳とを」とも解せる。種牛 (天) と乳牛 (大地) との交流はよく語られ、水、光熱が「白液」として天地間を行き来することを謂うものとも考えられる。3. 死後展開に再生した者は、その子孫の捧げる供物に頼って生活する。子孫の継続と増大とは『リグヴェーダ』時代には生命線であった。4.-5. 「祭式と布施の効力」、→ 上記本文 4. 節末参照。6. アリヤマンは部族慣習法の神格化。この詩節は、こんなことでこれまでの正義が通用するのか、と抗議しているものと解される。7. 詩人は、つまり、かつては神学議論に参加する資格のある卓越した祭官学者であった。8. 「しっぽ」は「ペニス」をも意味する。9. 北斗七星またはプレイアデスが考えられているものと思われる。太陽の7本の光線とも。地上に置き去りにされた人類の祖マールターンダ (アディティの8番目の末息子) とトゥリタとが重ねられている可能性もある。11. 「若々しい水たち」は銀河であろう。12. 天理にかなうことばを公に述べたことにより、天理の発現として川は流れ、そして太陽が昇る。10. および 16. 参照。14. ホートリは「(バターなどの供物を祭火に) 注ぐ人」、インドイラン共通時代に遡る主要祭官。ゾロアスター (ザラスシュトラ) もそれ (ザオタル) であった。15. 実現力をもつことばは、頭部にある思

考作用によって作られ、心臓に位置する意思の力（精神力, *krātu-*）を用いて、口にある発語機能（「ことば」）によって発せられると実現する。16. 「アディティに属する」（*ādityá-*）は次第に単独で「太陽」を意味するようになり、ヴェーダ散文では本来のスーリヤ *sūrya-* に代わって用いられるようになる。ここでは「正義にかなった、天理の発現としての道」によって、太陽の出現を謂うものと思われる。アディティについては、本文上記 2. 節中程を参照。17. 「窪み」*kūpa-* は「井戸」とも解せる。夜には火（アグニ、祭火）の光が届く範囲が「世界」*loká-*（原義は「光、明るみ、光の差す場所」）であるとされる。18. 「狼」は 11. にも現れる。ここでは、朝の初光の一種が考えられているものとも解される。19. 後半 2 行は讃歌を締めくくる繰り返しである。

祭場と天空地 (西村直子 29.4.2009)

ŚB VII 3, 1, 11 [Agnicayana, Āhavanīya の準備, 大地の耕作, 散水, 種蒔き]

tād āhuḥ | yād yóniḥ pariśrīto rétaḥ síkatā átha pūrvāḥ pariśrīdbhyo gārhapatyē síkatā
 nivápati. kathám asyaitád retó 'parāsiktaṃ páriḡhītaṃ bhavatīty. úlbaṃ vá úśās tād yád
 úśān pūrvān nivápaty eténo hásyaitád úlbena retó 'parāsiktaṃ páriḡhītaṃ bhavaty.
 áthāhavanīye pariśrīto 'bhímantrayate. tásyoktó bándhur. átha síkatā nivápati. réto vái
 síkatā. etáyo 'syaitád yónyā retó 'parāsiktaṃ páriḡhītaṃ bhavati. ||11||
 áthāhavanīya evāpyānvatībhyām abhimśāti. | ná gārhapatyé. 'yām vái lokó
 gārhapatyāḥ. svargó loká āhavanīyo. 'ddhó vá ayám asmim loké jāto yájamānaḥ svargá
 evá loké prajijanayīśítavyas. tād yád āhavanīya evāpyānvatībhyām abhimśāti ná
 gārhapatyē svargá evāinaṃ tál loké prájanayati.